

総力特集

東日本大震災で 長崎大学が 果たした役割

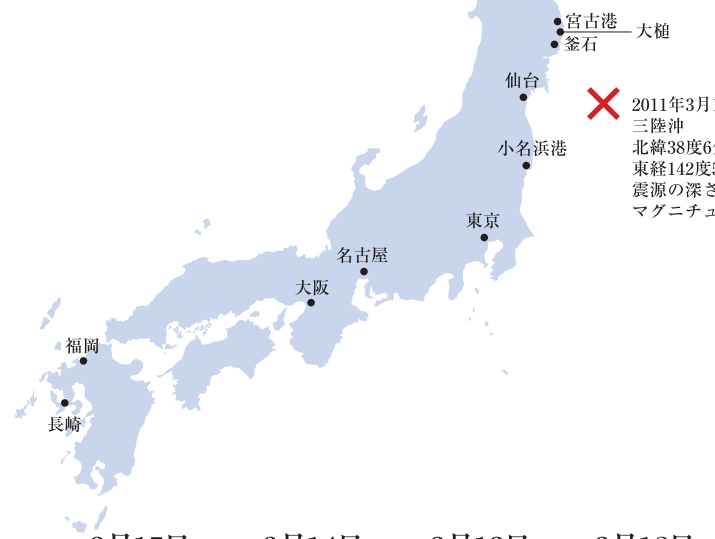
The
Great East Japan
Earthquake
and Nagasaki
University

原爆の惨禍を経験してもなお、
翌年は新芽を出した被爆クスノキ。
その生命力は、
再起に立ち上がったばかりの人々を勇気づけました。
「どんな災害からも、人は復興できる」
その事実を、私たちは知っています。

(長崎大学歯学部 玄関前にて)

変わる 2011 3.11

〇二一年三月十一日(金)
午後二時四十六分、日本の地震観測史上最大であるマグニチュード9.0の大震災が起こった。テレビ画面に次々に映し出される惨状。住宅が、車が根こ



2011年3月11日14時46分18秒
三陸沖
北緯38度6分12秒
東経142度51分36秒
震源の深さ24km
マグニチュード9.0

東日本大震災発生

3月19日 3月17日 3月15日 3月14日 PM5時30分 3月13日 AM0時0分 3月12日 AM3時30分

2011年3月11日
PM2:46
The Great East Japan Earthquake and Nagasaki University

3月12日 AM3時30分
長崎大学病院 緊急医療チーム DMAT出動
・長崎県の出動要請を受け、前日夕方にはスタンバイ完了、深夜3時半には被災地に向けて出発した。 P4

3月13日 AM0時0分
長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授
被災地をめざし東京を出発
・国際医療支援のNGO AMDAに同行し、新潟経由で18時間かけて仙台市に到着。さらに岩手県釜石市、大槌町、宮古市などで医療活動を行う。 P4

3月14日 PM5時30分
水産学部の練習船「長崎丸」被災地にむけて出港
・大学から県に提案し、県からの依頼を受ける形で、派遣は発生後3日後に決定。県や大学職員のほか、学生も3名が同乗し18日に小名浜港(福島県いわき市)、19日に宮古港(岩手県宮古市)で救援物資を下ろす。 P6

3月15日
長崎大学国際ヒバクシヤ医療センターの医療チームが
福島県立医科大を拠点に活動開始
・避難民への被爆スクリーニングや健康対応トリアージなどを指導。

3月17日
福島県知事より、長崎大国際ヒバクシヤ医療センターに
福島第1原発事故に関する専門知識の協力要請があり。
山下俊一教授を派遣
・センターの教授3名により、福島県立医科大の医師らを対象に、放射線の基礎知識や「医療人」としての心構えをレクチャー。

3月19日
福島県知事より、山下、高村昇両教授が
放射線健康リスクアドバイザーに任命される
・福島県内の一般民を対象にした山下、高村両教授らによる「原発事故と放射線健康リスク」講演行脚始まる。 P8

日本はこの日から

そぎ流され、仙台空港は一面の津波に覆い尽くされた。翌十二日(土) 大学入試終了後、長崎大学は支援に向けて動き出した」

——これは、調漸(とせんと)理事による東日本大震災支援報告書の冒頭です。

未曾有の大震災から数時間後、

この大学は、すぐさま被災地支援に乗り出しました。人々がまだ、テレビ画面を見ながら唾然(とつぜん)としているときに出された、決断と実行。主な動きを時系列で追ってみましょう。

災害当日の夕方には長崎大学病院の災害派遣医療チーム「DMAT」がスタンバイし、早くも十二時間後に被災地に向けて飛び出しました。その翌日、東京に出張していた長崎大学熱帯医学研究所の山本太郎教授が、新潟経由で被災地入り。翌々日には水産学部の練習船「長崎丸」が出港を決定します。文字通り目を見張るスピード。そして三ヶ月が過ぎようとしている今もなお、福島県内では特別チームによる医療支援が続けられています。今回の大震災に、長崎大学はどうかわり、役立ってきたのか。関係者や学生たちはいったい何を思い行動してきたのか。ひとつひとつを検証していきます。

3月19日

募金活動スタート

・大学と学生が一体となった被災地支援募金動き出す。
ちなみに税金で運営される国立大学法人が募金活動をするのは、極めて珍しい。
41日間で総額1273万9322円。日本赤十字社に寄託したほか、大学が行う被災地での医療支援の活動費用に充てた。

3月23日

長崎丸、日本をほぼ一周する形で帰港

AM10時00分

原発事故の影響で空洞化する福島県南相馬市に焦点を合わせ、長崎大学の医療支援チームの展開が始まる(第1陣)

・福島県からの要請に基づき、医療チームを派遣。医師や看護師ら314人を1チームとして1週間交代で派遣。避難所に移れず、病院にも行けない患者を巡回して診察した。

P12

4月2日

長崎大学と福島医科大の連携協定成立

・片峰学長も福島入りし、調印式を執り行う。

4月10日

医療支援チーム第2陣、南相馬市入り

4月17日

医療支援チーム第3陣、南相馬市入り

4月24日

医療支援チーム第4陣、南相馬市入り

5月1日

被災大学院生の研究支援

・被災で学習や研究が困難になった学生や研究者を受け入れるプロジェクト。
東北大学院の院生1名を特別研究学生として受け入れた。

P14

5月8日

医療支援チーム第5陣、南相馬市入り

※医療支援チームの二連の活動は6月末まで続けられた。

東日本大震災
発生からの
長崎大学の動き

山本太郎

長崎大学
熱帯医学研究所教授

被災地の中も外も総力戦 行動と判断と発信がカギ

今回の大震災初期に、現地での医療活動を行った長崎大学関係者がいました。その中の一人、山本太郎教授の話を聞きました。山本先生は昨年ハイチ大地震の折に現地での医療支援を経験。その時活動を共にしたNGO「AMDA」とのコラボが今回も実現します。震災時、出張先の東京にいた山本先生は即座にAMDAと連絡を取り合っって車に乗って日本海側を伝い、震災から二日目の深夜には早くも仙台市に入りました。「自己完結できるよう、食糧や水、トイレ、被災地で必要とされるだろう紙オムツや簡易トイレも準備しました。同時に現場の医療で何かが必要か考え、発信しようと思いましたが、それを受け止めてくれる人は必ずいると思ったので」。ここから被災地からのメール配信が始まります。

「三月十六日、昨夜、岩手県遠野市入り。余震が続いています。暗闇に覆われた街に雪が降ってきました。同行の医師と看護師は釜石と大槌の出身。被害を受けた街には、親や兄弟、知人がいます。トンネルを抜けると大槌出身の看護師が『雪で、よかつた』とつぶやきました。『景色が見えないから』。その向こうにあるべき町が見えない、本当のことなのか、雪のためなのか分からない、それが救いだ」と

圧倒的に足りない人手。医薬品は途切れ高血圧の方に対応する手立てもありません。孤立した老人ホームへ山道を分け入り診療したり、手術後の入院患者を遠野まで託されたこともありました。まさに総力戦。そんな中、先生は、この災害救援と復興には海外との密な連携が必要であると感じます。そのために

現場の声と「日本は負けない」というメッセージを、海外にネットワークと影響力を持つ人々に送ります。

「被災地に入り三日目。(中略)三陸海岸では、街は更地となり、きつい潮の匂いがします。『消滅した』という言葉も大げさな表現ではありません。それが、三陸特有の入り組んだ入り江ごとに見られるのです。報道では、全体の安否不明者が約一万人と報じていますが(三月十七日現在)、大槌町の安否不明者だけでも一万人を超える可能性があるとか。これは私たちが未だこの地震の全容を把握しておらず、被害を過小評価している可能性を示しています。長い復興支援が必要となります。海外の国との協力のために、民間の外交ルートによる情報発信や連携は、今から図っておくべきです」。

このメールは先生の研究室で英訳、中国語訳され、海外に発信されました。三月十八日、長大の医療支援チーム第一陣と合流。



大切なのは一人ひとりが能動的に行動すること。

未曾有の事態にマニュアルはありません。

何ができるか。

自らの頭で考え行動すること

長崎大学病院 DMAT 現場へ出動!

大震災発生3時間後には長崎県からの要請で早くもスタンバイ、その夜3時には出動した災害派遣医療チーム「DMAT=Disaster Medical Assistanse Team」。医師と看護師、業務調整員(救急救命士、薬剤師、放射線技師、事務員など)で構成されるもので、地域の救急医療体制だけでは対応できないほどの大規模災害や事故の急性期(おおむね48時間)の救援活動を行います。大学病院からのDMATは4名。福岡空港から自衛隊機に乗り込み、宮城県仙台市へ。駐屯地に設置したテントでは各地から自衛隊機で運ばれてくる患者の応急処置を行い、被災圏外の病院へ。山本太郎教授と連携した大槌町での医療活動でも活躍しました。



大槌町では夜間当直もある診療を開始しました。電気も水道もない避難所に泊まり込みます。「いつも学生たちに『ウォームハート、クールヘッド』と教えています。災害時の医療支援で常に意識するのは、共感と距離感のバランス。いつかはその土地を離れなければいけない我々は第三者だから、避難所ではない外部で宿泊する。しかしこの

時は情報がほとんどない状況で、外の人が本当に自分たちを見てくれているのか?といった不安が広がっていました。余震もある中で、誰かが一緒にいてくれる、その安心感が必要だった。それで、今回は泊まろう、と」まさに現場判断でした。

山本先生は最後にこう語っています。「重要なのは、第一に一人ひとりが能動的に考えて行動すること。未曾有の事態にマニュアルを大切にすること。日本中が大変だ、大変だと興奮状態で悲憤慷慨してしまうのではない。長崎の人が普通に生活することが被災地支援になる。つまりお互い様なんですよ」。

継続支援のための心構えを気付けてくれました。

やまもとたろう
1964年生まれ。長崎大学熱帯医学研究所教授。専門は国際保健学や熱帯感染症疫学。ジンバブエやハイチでの長期の医療活動の経験もあり、ハイチ大地震の折は、現地を知る日本人として国際支援の先頭となって活躍。著書に「感染症と文明——共生への道」「大震災のなかで私たちは何をすべきか(内橋克人編)」「共に岩波新書」など。先生がつづった被災地からのメールは、長崎大学のホームページでも閲覧可。

支援物資を満載した船が被災地向けて長崎を出港する、しかも長崎大学水産学部の練習船が！——このニュースを聞いて、誰もが度肝を抜かれました。震災から三日後。大きな動揺だけが世間を覆っていたころでした。前出の調理事による震災活動報告です。

「三月十三日夕刻。橘勝康水産学部長が学長へ練習船『長崎丸』の派遣を提案。十三日(日)午前、橋、須齋(理事)が長崎県の震災対策本部会議にてその案を提議した。十四日(月)県から同日中の出航を依頼される。午前九時から臨時役員懇談会で練習船派遣を正式決定、出港は午後五時半とした。大学で支援物資の毛布、トイレットペーパー、粉ミルクなど四百万円分を調達、派遣者人選に入る。学長の強い意向で『希望する学生には、是非参加させる』とのこと。私の医学ゼミの学生、OB/OGに参加呼びかけのメールを携帯に送る。『今日、水産の船で東北の支援に行く。参加希望者は十日分位の荷物を持って二時間後に学長室に来ること』。研修医一年目原田直樹君、医学部三年生野田晃成君が駆けつけた。水産学部修士課程学生土屋善史君、工学部一年松岡広明君も参加、今どき

The Great East Japan Earthquake and Nagasaki University

「東北のどこかへ。出港のとき。決まっていたのはそれだけだった」

の学生も捨てたものじゃない」。船に乗ることになった松岡君曰く。

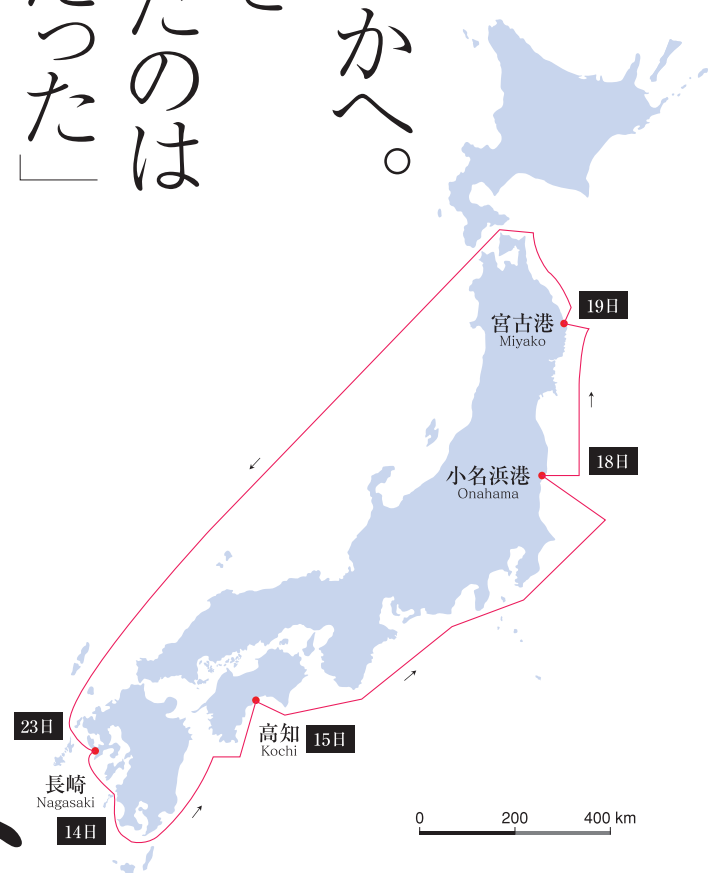
「先輩が、『被災地に船を出せないか』と言いついて企画書を提出していたので、当然自分も乗りたかった。親の説得ですか？むしろ、ダメな理由あるの？って感じでしたよ」

そして出港。遠ざかっていく長崎を見ながら、松岡くんは尋ねます。

「それで調先生、この船はどこへ行くのですか？」

「いい質問だね……決まっちゃいない(キッパリ)」

「東北のどこかへ。それ以外未定のままの出航だ。(中略)丸四



日の航海で福島沖へ。よく揺れて酔いスタツフ続出、一名は飲食が二日間できず脱水症で点滴一〇〇〇ml、研修医が活躍した。寄港先選択も難航した。練習船は喫水線が深い為、浅い漁港には入れない。養殖用漁網など漂流物が浮いているとスクリーに絡まり操船不能になる可能性がある、仙台港は港湾火災が鎮火していない、水産庁、海上保安庁の安全確保のため入港許可が出ているところに限られる、などの情報の中で二転三転した。最終的に福島県の強い要請で小名浜港に積載物資の半分を下ろし、残り半分を岩手県宮古港に下ろすことに決定。二時

被災地へ



「長崎丸」報告も あった学生イベント 「今ここからできること」 Sip-S

6月5日(日) 中部講堂

「長崎丸」に乗船して被災地に支援を届けた学生の一人、松岡広明君自らが体験を発表する場が、6月5日(日)文教キャンパス中部講堂でありました。約150人の聴衆を前に、実際に現地に入ったときの様子や放射線測定の話などを語る松岡君。このイベントでは、そのほか震災被災者支援で活動する市民グループなどを招き、今、長崎でできることは何かを熱く討議。主催したSip-Sは、東北大震災を機に立ち上げた組織で、長崎大学の学生が今後どうやって被災地支援に関わっていくかを目的に活動しているものです。



「帰ってきたら、非常事態の被災地と日常生活の長崎の差がすごくて混乱した」など率直な話もできました。

- 1 大槌町での荷卸しの様子。学生もがんばりました!
- 2 吉村船長ら士官と乗組員22名が一丸となって航海しました。
- 3 航海のレーダー図。小名浜港へ舵をきることに。
- 4 物資積み下ろしを終えた学生たち。中央が調理事。
- 5 宮古港に残る津波の爪痕。



「物資搬出後、全てのスタッフの靴底からは600-2000cpmの異常値が検出され用意したホウ酸水で除染。連絡した山下教授からは「研究室では300cpmで除染対象だが緊急災害対応では15,000cpmが基準」とのこと。胸をなで下ろす」(調理事による報告書より)

がっていた。
 路上に転
 車は逆さにな
 った。
 顔は泣きそうに見えた。街中
 あるはずのない漁船が道路を占
 拠し家々は倒壊、

終了後、メンバーは二手に分かれます。先乗りしていた山本太郎教授たちと合流する医療班と、同じ船で長崎へ帰るチーム。二つの港での物資補給を終え、船は津軽海峡へ日本海を経由して一路長崎へ。
 「長崎の港に着くまで、船の上では震災関係のニュースばかり見ていました。食事は、行きと比べてスタッフが減ったぶん少し豪華になりましたね。もっとも、行きは大しけでみんなほとんど食べられなかったんですけどね(笑)」
 三月二十三日午前十時、長崎丸は長崎の港に帰ってきました。八日間の船旅は、学生たちにとって何を残したのでしょうか。ちなみに松岡君は、生まれて初めて乗った船が、この「長崎丸」だったのだそうです。

間おきに測定したシンチレシー
 ヨンカウンター(放射線大気測
 定器)による大気中放射線量は
 福島沖に近づくとき微妙に上昇し
 はじめ緊張感が高まる。早朝、
 小名浜港入港。福島県といわき
 市の港湾関係者が受け取りにき
 た。船による最初の救援物資と
 のことで、大変感謝された。こ

の日の午後、自衛隊の船も救援
 物資を積んで入港予定とのこと
 だった。原発事故による放射線
 被害を恐れてトラックもボラン
 ティアも来ない、マスクさえも
 も逃げてしまったと言う彼らの
 顔は泣きそうに見えた。街中
 あるはずのない漁船が道路を占
 拠し家々は倒壊、

放射線被害を恐れてトラックもボランティアも来ない、
 マスクさえも逃げてしまったと言う。
 福島の人たちの顔は、
 泣きそうに見えた

長崎丸、



今回の東日本大震災の長崎大学の活動については、この二人を抜きには語れません。山下俊一教授と高村昇教授です。山下俊一先生は、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長ですが、放射線保健医療研究の第一人者として、スイス・ジュネーブにあるWHO（世界保健機構）では、放射能災害の国際対応に二年間携わるなど、まさに第一線で活躍しています。その手腕を買われ、東京電力福島第一原子力発電所の事故後、福島県からの要請を受けて「福島県放射線健康リスク管理アドバイザー」に任命されました。NHKニュースの解説など、メディアでもすっかりおなじみになりました。また、高村先生はWHOの技術アドバイザーを務め、チェルノブイリの影響が色濃くでたベラルーシやカザフスタンでの医療協力が高い評価を得ています。今もお二人は、「正しく怖がる」というコンセプトの元、放射線のリスクについて福島の人々に理解してもらおうための講演活動を、三十回以上も行っていきます。そのうちのひとつ、福島市で三月二十一日に行われた講演会の様子を、調理事が報告書に記しています。「福島では山下俊一教授グループが頑張っていた。福島市では、

講演会『福島原発事故の放射線健康リスクについて』が行われた。参加者は市民、避難民など約五百名で立ち見もでるほど関心は高く、パニック寸前の雰囲気にも包まれている。講師・山下俊一、高村昇、挨拶・調漸。まず、高村教授が放射線障害の概要とチェルノブイリの経験を話し、次いで山下教授が現在の福島県内の放射線レベルが人体に与える影響を説明した。緊迫した空気で始まった講演は合わせて一時間ほどで、お二人の穏や

かな話し振りもあって、会場は説明内容に応じて時には拍手や笑いがみられるようになり、話が進むとともに会場全体に安堵感が広がるのが手に取るようにわかる。しかし、後段の質疑応答になると様相は一変し、質問者が三十人近く列を作った。『空気も水も食材も放射線が検出されて、テレビで官房長官は食べるな、と言っているのに先生達は安全だという。ではどうして食べるなどいうのか』、『子ども、妊婦はどうしたら良いのか』、『井

放射線リスクコミュニケーションとは

放射線についての健康リスクを幅広い視点から考察し、私たちの生活にどのような影響があるかを正しく伝えて、それらを理解し合うこと。



ーション



戸水と水道水はどちらが安全なのか」、「今後、事故は収束するのか、しなかったらどうなるのか」、「情報は全部開示されているのか、知っていて隠しているのではないか」、「なぜ、距離は離れているのに大気中の放射線が高いところと低いところがあるのか」、「屋内退避地区ではないが、大気中の放射線濃度が高い中、自分はガソリンがないので二時間かけて自転車通勤しているが大丈夫か」、保育園や小学校の教師からは「子どもは外で遊ばせていいのか」など、環境汚染の中での暮らしや健康障害への不安や疑問、今後の事故の行方についての疑問、行政の対応への不満や怒りなどが殺到した。二人が質問の一つ一つに丁寧に答えることによって住民が次第に納得していく姿は圧巻でさえあった。予定を一時間半超過したが最後には会場全体が説明に納得して一つになって大きな拍手で終わった講演会だった」。

講演時間がたとえ三十分ほどしか取れなくても、質疑応答には六十分を振り当てる——これは、後日、山下先生から聞いた、福島での講演会のやり方です。そのくらい、福島県民は専門家に聞きたいことが山ほどあり、

それを先生方がきちんと受け止めて「対話」を大切にしている様子がうかがえます。ちなみにこの講演会では、ピリピリと張りつめた空気の中にも「こんなときに福島に入っていたらどう本当に感謝している」、「つらいと違って怒りが別の方向に向かうので、お許しください。皆さんも怒りを別の方向にぶつけるのはやめましょう」、「先生方二人の穏やかな話し方を聞いていると、すごく安心しました」といった、福島の人々の心からの言葉が印象的でした。



実録 福島市における 講演会



山下俊一教授

高村昇教授

Risk Communication

リスクコミュニケーション の大切さ

震災以降、ずっと福島へ東京を
行き来しているという山下俊一
教授。忙しい合間を縫って、長
崎に戻られたところでインタビ
ューできました。いただいた名
刺には福島のマークも！ もう
すっかり福島の人のような……。

「はい、もうこうなったらしよ
うがない。今も福島は異常事態
なので。多分、あちらに
しばらく住むことになるでしょ
う。引き受けたものの、掃除と
洗濯とかはどうしようかと。
でもうちに帰ったら、家内は単
身赴任用に荷造りをすっかり済
ませていました(笑)」

——先生は、そもそも最初は自
分の出番ではないと思われてい
たとか。

「そう、我々の出番はもっと後
だろうと思っていました。実際
原発事故で蒸気を調整する弁を
触ると言っていたので環境汚染
は間違いない。ところが三月
十五日に状況は一変しました。
原発から六十キロ離れた福島市
の雪に放射線測定器がガーガー
反応した。これはまずいなど。
実際、現地の大学の医療職もパ
ニックになっていたし、国をは
じめかなり混乱していました。
それで要請を受けて自衛隊のヘ

リで現地入りしたのです。放射
線に関しては、ずっと研究して
きた長崎や広島が出て行かない
と収まらない。状況は刻々と変
わっているし、平時のマニユア
ルは通用しない。長崎大学の意
思決定も早かったので助かりま
した。『私は闘うよ』と言うと、
学長が『じゃあ全面的に支えよ
う』と言ってくれました」

——放射線についての知識を理
解してもらいたい、と福島県内
での講演を重ねています。

「だいたい一回あたり五百人ほ
どで三十回以上、それでも一万
人。徹々たるものです。だから
メディアが大切だった。特に現
地のメディアはラジオも新聞も
冷静に私の話を伝えてくれまし
たから、助かりました。それで
もね、こういう状況では火中の
栗を拾うようなもの。パッシン
グも最初から覚悟していたこと
です」

——え、最初から

分かっていた……!?

「無責任に煽るだけならば誰で
もできる。でも科学的根拠でも
ってリスクについての正しい知
識を伝えるのは誰かがやらなけ
ればいけない。ただ、ちょっと
反省するのは、私ばかりがや

Interview

山下俊一

長崎大医歯薬学総合研究科教授



偏見にさらされても
正しいことを言い続ける。
それは誰かが
引き受けなければいけない

りすぎた。何しろゆとりがなかったからね。非常事態のときは、『シングルボイス・ワンボイス』といって、ブレないほうがいい。しかしこれも一人の力ではだめ、仲間が必要なのです。だから大学教育に意味がある。正しいことを伝える後継者を育てなければならぬと思っています。福島の人たちは、私がほろくそにバツシングされたりしているのを聞いて、『心が折れそうだ』と言っている。それが可哀想でね。それにしてもとにかく事故が収束しないことには……もう、こればかりは祈るような気持ち」

——講演の質疑応答でも福島の
人たちに本当に真摯に向き合っ
ていますね。

「うん、それは患者さんとの対話と一緒に。これだけネガティブファクターがある中で、誰かが前面に出て引き受けないとまあ本当は国や県がやるべきだけれどね。この前も、お母さんたちが不安がってね。市民大清掃の目に来る、ドブさらいとか心配だと。だから私は『男は大丈夫なんだから、男にさせなさい！』。そしたら会場のお母さんたちは大拍手（笑）。しかしこの二か月……自分の人生では一番したくないことをやっていま

すね。罵倒されたり。本当にすごいよ。たまにこうして長崎に帰ってくるどほつとします。人生にはいろんな岐路があつて、ラクな方と険しい方、右か左か選ばなければいけない。険しい方を選ぶのも、人生かな」

——なぜ、そちらを
選ぶのでしょうか。

「永井隆博士はずつとそうだったからです。彼も自分が苦労する方を取った。常に死と向き合っていた彼は死に向かつて努力をし、苦労する方が天国への貯金になると思っていた。僕もクリスチャン、迫害を受けてきた浦上の子孫ですよ。だから人生観の中にそれがあるんでしょうね。まあとにかく、居合わせた人がベストをつくす。粘り強く、ギブアップしないで。今回の勝

負はそこです」

JR福島駅では、毎日夕方八時になると、永井博士ゆかりの「長崎の鐘」のメロディが流れるそうです。作曲した古関裕而氏は福島県出身なのだとか。二十年前、福島を最初に訪れた山下先生は、そのメロディを聞きながら、運命的な「縁」を感じたそうです。

「福島には、原発の収束が未だ見えず塗炭の苦しみにある避難民、そして放射能の土壌汚染、環境汚染の中で生活を余儀なくされている方々が多くおられます。そのうえ風評被害や精神的影響も重くのしかかっています。私はその苦しみを分かち合いたい。長崎の間人はみんな、無念のうちに亡くなられた原爆被害者の『思い』を受け止めて生き

てきました。今、放射線に翻弄されている福島の応援団として先頭に立つのは当然のことだと思えますよ。大丈夫、日本人がすべからず福島の重荷を背負っていけば、ちゃんとやっていきます。要は人の心の問題だから」

山下先生はそう言っていて、静かにうなずきました。

やましたしゅんいち

1952年長崎生まれ。長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長。1990年より原発事故後のチェルノブイリを100回以上訪れ、国際医療協力に尽くす。2005年～07年、WHO(世界保健機構)ジュネーブ本部で放射線プログラム専門科学官を務める。2011年福島県放射線健康リスク管理アドバイザーに任命される。

世界で唯一 被爆した 大学としての使命

今回、福島で活躍している山下俊一教授や高村昇教授をはじめとする先生方は、国のグローバルCOEプログラムに平成19年度に採択された「放射線健康リスク制御国際戦略拠点」という重点研究課題に取り組んでいます。なかでも国際放射線保健医療研究は、チェルノブイリやセミパラチンスクをはじめとする汚染地域の研究機関や放射線医療科学の世界トップレベルの拠点など、18拠点を結び、放射線が人体におよぼすリスク(危険性)を明らかにし、制御していくものです。被爆から66年。これまで長年積み上げてきた放射線に関する高度な知識を応用し、放射線健康リスクコミュニケーションの人材育成に力を注いでいます。



大楯町の弓道場避難所の様子。

今も継続する さまざまに 医療支援

長崎大学では、医師や看護師など二名〜四名を一チームとした医療支援も継続して行っています。岩手県大楯町に始まり、「放射線を恐れて誰も近寄らない、医療スタッフも不足している」という福島県からの叫びにも似た必死の要請を受け、四月二日から五月末まで約一週間交代で福島県南相馬市にも入り活動。総務として後方支援に携わった須齋理事は、「職員を送り出す以上はまず自分が行って状況を把握しよう」と、と早い時期に現地入りしました。「縦に長い南相馬市の場合、南と北で放射線量も違います。屋内待機のエリアの訪問診療となると、自衛隊の車に同乗しての往診です。そこに人がいるかないか、どんな状態の患者さんなのか、役所が作成するリストが頼りと

手を添えて安心感を伝えます。





長崎から支援に入ったのがひと目でわかるウインドブレイカー。



一人一人ができることを考えて実行していました。



南相馬市の避難所で歯科治療をする予防歯科の齋藤先生。

「そんな中で『冷静に行動するには放射線に対する基礎知識が必要』と、勉強会をみっちり行います。物理の話からシーベルトの数字の意味するところまで。おおよそを理解した上で志願してもらい、チームを組んだのだそうです。「当初は歯科は入っていないかったです。」「当初は歯科は入っていないかったです。」「当初は歯科は入っていないかったです。」と歯科診療が必要になるはず、という齋藤俊行教授の意見をもとに、第一陣からチーム入りしてもらいました」

避難所などで口内の衛生状態が悪くなれば肺炎から死に至るケースがあるとの報道がされるころ、すでに長大チームには歯科医が入って活動していたのです。

放射線の風評被害にさらされていた福島県民にとって、被爆地長崎からの医療支援は心強いものでした。医療支援の現地レポートにはこうあります。「長崎大学と書かれたウインドブレイカーは効果絶大。『え！長崎から？』と驚かれ、『ありがとー！』と目を真っ赤にする方をどれだけ見ただろうか」

その後も、さらに精神科や介護の専門スタッフを加えて充実させ、被災地での医療支援を続けています。

The Great East Japan Earthquake and Nagasaki University

自衛隊が各所にお風呂を作っていました。



当初不足気味だった医薬品だが少しずつ改善の方向へ。



今回、様々な関係者の証言で印象的だったのは「非常事態のときは、自分で考えなければいけない」。いわゆる「現場判断」。ここであらためて、今号の学長室便りをご覧ください。「現場に強い大学、危機に強い大学、行動する大学」それはつまり長崎大学の伝統であり個性ということ。調理事は語っています。

「例えば船を出すと決定後、短時間で財務が資金を調達してくれ救援物資を大量に購入できませんでした。また被災地から、休日だろうと夜だろうといつ電話しても誰かが出てくれた。医療支援にしても、誰かが行く以上はその人の分を別の誰かがカバーする体制が必要。つまり後方支援あってこそ行った人間は気持ちよく仕事ができる。そういう意味では大学全体で一種のチームワークがうまくいった。個性が醸成されたな、という実感があります。今後は、ヒバクシャ医療センターを中心に何人かは福島に常駐するなど、継続した支援を行っていきます」

五月には被災地域の学生を長崎大学に受け入れる支援プランも実現しており、しばらくは人

The Great East Japan Earthquake and Nagasaki University



の行き来が活性化しそうです。東日本大震災の復興までの道のりはまだまだ辛く険しいものです。しかしその痛みを我が痛みとしてともに背負っていく——長崎大学は、学校をあげてこれからも被災地を支援していきます。

大切なのは、 歩き続けること、 思い続けること

長崎大学理事
調 漸

「今回の東日本大震災における一連の長崎大学の活躍は、記録集としてまとめ、長崎新聞社から発行も予定しています」と、調理事。楽しみですね！

被災地域の 学生を長崎大学で 受け入れ支援

長崎大学が提唱した被災地域の大学の学生支援プランを活用して、東北大学大学院から長崎大学に受け入れられた特別研究生、小野綾子さん。津波が襲った地域以外でも高額な機材が壊れるなど被害が大きかったそうです。その後も弱い余震が数分おきに来る状態で、パソコンも不安定。「とても研究が続けられる環境ではなかったので、長崎に来てほっとしています」。小野さんは宇宙でも応用できる自然音のストレス応答に関するデータ解析と論文執筆を中心に研究を進めています。

